奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

小中学生の部

令和六年五月度　入賞句一覧

投句数　千四百六十句

長町　誠司　選

特選

入学式先輩の背中見せてやる　　加茂郡川辺町　佐藤　柚杏（中三）

俳句の授業で小学校におじゃました時のことです。授業を終え帰宅しようと体育館の前を通り過ぎようとしました。すると、卒業式の練習だったのか、「入学生に先輩の背中を見せてやれ」と先生と思われる大きな声が聞こえてきました。この句をみて、その時のことを思い出してしまいました。後輩は先輩の背を見て学ぶということですね。作者の背中は後輩たちへの見本となったに違いありません。

さくらたち仕事が終わりちっていく　　大垣市　川瀬　咲希（小六）

季節によるさくらの変化に関心をもち、「仕事」という表現で開花の営みをうまく俳句にしました。散ることで一区切りの仕事を終えたわけですが、桜の季語は春だけではありません。夏は「葉桜」となり、美しい緑が通学路に映えます。秋には「桜紅葉」となり葉に黄や赤みがさします。冬になると葉は落ちて枝だけになりますが、すぐに冬芽が出て暖かくなるのを待っています。季節ごとに仕事をしているのですね。

新学期ドアをあければ仲間達　　大垣市　小門　里奈（小六）

「新学期」という語は厳密に言うと二学期も三学期も含まれます。そのため、春の季語としては弱いかもしれません。それでも一学期が新学期と認識されやすいのは、やはり四月からの新年度のイメージが強いからでしょう。この句も、中七・下五のフレーズから、明らかに新学年への心情が読み取れたので選びました。新しい教室のドアを開けて、友達の顔を見つけたときの喜びと安心感が伝わってきます。

秀逸

桜散る季節に僕は生きている　　加茂郡川辺町　馬場　岳空（中二）

忘れない年始に起きた能登地震　　加茂郡川辺町　木下　心音（中二）

給食のにおいを届ける春の風　　加茂郡川辺町　櫻井　凰琉（中三）

しゃぼん玉笑った記憶がよみがえる　　加茂郡川辺町　前島　美来（中三）

教室から見るのは最後桜の木　　加茂郡川辺町　山田　朋香（中三）

さくらの木ぼくがうまれたとしの木だ　　大垣市　くらはし　みなと（小三）

湖のほとりの桜散っていく　　大垣市　兒玉　碧依（小五）

しゃぼんだまみんなをうつしてとんでいく　　大垣市　遠藤　愛來（小六）

たんぽぽは人にふまれて生きている　　大垣市　陸田　篤希（小六）

桜散り次は地面が満開だ　　大垣市　渡辺　美空（小六）

入選

雪解の子の声響く登校日　加茂郡川辺町

川に浮く桜とボート川辺町　加茂郡川辺町

春風が散った桜を連れてゆく　加茂郡川辺町

桜咲くとうとう私も三年生　加茂郡川辺町

しんがっきいきなりやすむいやだった　大垣市

さくらまう行きさきどこか気になるな　大垣市

ひなまつりおだいりさまがわらってる　大垣市

ちょうが飛びそれを目で追う黒い猫　大垣市

なばなさくこれがわたしのうまれた日　大垣市

弟があついあついと下校中　大垣市

桜の木次の春へとじゅんび中　大垣市

ピンクから緑に着がえた桜の木　大垣市

この手には明るい未来新学期　大垣市

春休み勉強したりねていたり　大垣市

こんにちはご近所さんと春の風　大垣市

ひなまつり家族でつくる手巻寿司　大垣市

春の日に制服が届くたのしみだ　大垣市

ばしょうの葉未来に向けて真っすぐに　大垣市

芭蕉の葉きれいな空へ手をのばす　大垣市

ししまいにかまれてみたいまってるぞ　大垣市

選者吟

とろろ汁藤川宿の客となる　誠　司

小中学生の部

福園　恵菜（中二）

嶺川　千晶（中二）

加藤　蒼士（中二）

加納　希音（中三）

ほりえ　げんき（小三）

福井　咲歩（小四）

伊藤　三桜（小四）

矢野　斗真（小五）

新道　菜々花（小五）

足立　妃栞（小五）

須貝　うめこ（小五）

野崎　友里（小五）

柳瀬　才嬉（小五）

前田　瑞季（小五）

浅野　晴香（小五）

木村　美紅（小六）

池田　夢杏（小六）

臼井　千結（小六）

鈴木　理生（小六）

みわ　ひとひ（小一）